拝啓、融けゆく世界へ　＃7

雨宿りの村編③

鳥沼　憂

【これまでのあらすじ】

降る雨の九七％が人をも融かす酸性雨と化し、十年前の「第二次世界大天災」による被害が色濃く残る2XXX年の東京。A.C.I.D.（対天災国際防衛省）に所属する十七歳の青年・天海快晴は、天災を引き起こす怪物「天魔」を狩る「調停士」として、自身の平穏な生活を奪った天災への復讐のため、日夜天魔との戦いに身を投じていた。

七月某日、天海とその妹で雲を晴らす力を持つ「天ノ巫女」である照、そして二人のお目付け役として呼ばれた新人調停士兼整備士の日暮凪沙は、「雨宿りの村」と呼ばれる隠れ里へ遠征に来ていた。新たな傘を作ってもらうため傘職人・霧矢の元を訪れた天海だったが、霧矢に実力を認めさせ傘を作ってもらうには、模擬戦で彼の娘であり京都支部屈指の実力者である霧花に勝つ必要があると告げられ、天海は霧花との修行に明け暮れていた。

一方、凪沙は単身霧矢の元へ赴き、「傘の作り方を教えてほしい」と懇願するが――

☆過去作バックナンバーはこちら☆

＃1・＃2（プロローグ）……R4年度新入生歓迎号
＃3（梅雨晴の戦い・前編）……R4年度創苑1号
＃4（梅雨晴の戦い・後編）……R4年度創苑3号
＃5（雨宿りの村編①）……R5年度創苑1号
＃6（雨宿りの村編②）……同じ号に載ってるよ！

【主な登場人物】

天海快晴……天災を起こす怪物、天魔を討伐する組織《A.C.I.D.》の戦闘員『調停士』である十七歳の青年。妹の照を溺愛している。十年前の《第二次世界大天災》により左目の視力を失っており、眼帯を付けている。

天海照……快晴の妹。黒髪のサイドテールで、常にレインコート等の雨具に身を包んでいる。《第二次世界大天災》で被災した後遺症が遺っており、基本的に《A.C.I.D.》東京支部の医務室にて保護管理下に置かれている。「天ノ巫女」と呼ばれる、雲を晴らすことができる能力を持つ。

神宮寺陸斗……天海ら調停士の戦闘等をサポート・バックアップする調停士補佐官。ブロンドの髪を後ろで束ね、青縁の眼鏡をかけている。東京支部全体の副隊長でもある。幼くして両親を失った天海兄妹の親代わりのような存在。

日暮凪沙……東京支部の新人調停士兼メカニック。ピンクの髪をツインテールにした小柄な少女。機械いじりとかわいいものが好き。快晴に密かに（？）恋心を抱いている。

京極霧花……京都支部の調停士。外部の人間には存在が秘匿されている「雨宿りの村」の案内役を務める。村の傘職人・霧矢の娘。神宮寺とは過去に一度だけ会ったことがある。

＊　＊　＊

「お願いします。私に、傘の作り方を教えてもらえませんか」

傘職人・京極霧矢の面前で、深々と頭を下げ懇願する凪沙。しかし老人は眉一つ動かさず、突き刺すような視線で一瞥する。

「……何故、儂が貴殿に傘作りを教える必要が有る」

古風、というのともまた違う、さながら漢語のような喋り方が、余計に凪沙を拒絶しているように感じさせる。だが凪沙は気後れすることなく、思いの丈を伝えるべく口を開いた。

「あたし、まだ調停士として駆け出しで、何もできなくて……でも、カイせんぱ……天海先輩や照のために、何かできることがあれば、したいんです。……あたしにも、守りたいものがあるから」

大好きな『可愛い』を守るため――調停士としての動機が他人と比べて相応しくないのではないか、と凪沙は思い悩んでいた。しかし、今遠征を期に照へ打ち明けたことで悩みが吹っ切れ、自分の思いに素直になることができたのだった。

しかし、そんな葛藤と決意など露も知らない霧矢は、凪沙を見下すかのように鼻で笑う。

「東京の者は皆、そうやって理想ばかり語る。笑止」

「……っ」

なぜだかは分からないが、霧矢もその娘の霧花も「東京」という場所に対するイメージが良くないらしく、時たまこうやって悪態をつかれることがあった。が、凪沙も今の発言は聞き捨てならないと即座に噛みつく。

「好きなものを守りたいってことの、どこが理想論なんですか。大体、それを言ったら霧矢さんだって――」

「否。儂の言うは其れに非ず」

雷のように、ぴしゃりと霧矢の言葉が割って入った。凪沙は知らず知らずのうちに前屈みになっていた体勢を戻しつつ、じゃあ、と独り言のように呟く。

「新人の貴殿に、彼奴らの為に出来ることが有る、と思っているのが、厚かましい話だと言うのだ。今の貴殿に、何が出来ると言う」

「っ、そりゃ……私にできることなんて、まだ少ないかもしれませんけど」
それを探すために、こうして頼み込んでいるというのに――そう不満げに思った矢先、霧矢から唐突に話が切り出される。
「昨日、あの調停士が使っていた傘。あれは、貴殿が作ったのか」
凪沙は前日の、霧花と天海の打ち合いを思い返す。確かに自分が整備したとは伝えたが、元々自分が作ったものかどうかは言っていなかった。
「あ、いえ……元々は普通の、支部から供給されている傘で……前に先輩が戦ったときに壊れちゃったので、直すついでに整備しておいたんです」
整備士の主な業務は、調停士の用いる装備や備品の修繕である。酸の雨にも耐えうる特殊な加工が施されているため、専門的な知識を持った者でないと折れた骨一本直すこともできない。そのため、なり手が不足しているのが現状であり、整備士は組織全体においても重宝されている。
彼女のように手癖で修繕の際に「アレンジ」を施す整備士もそれなりにいて、言わばある種の「味」のようになっているのも確かだった。とはいえ、凪沙の何でも可愛らしくするというアレンジは少々人を選ぶのだが。
「左様か」
霧矢の口調は、どこか小馬鹿にしているようにすら感じられた。
「然らば尚の事、貴殿に傘は作れぬ」
「……っ！！」
ぐさりと脳幹を突き刺すような物言いに、目眩がしそうになる。昇った血が煮えたぎるのを感じながら、考えるより先に言葉が出た。
「な、何を根拠に、そんなこと分かるんですか！」
その勢いは今にも老人の胸ぐらに突っかかっていきそうなほどだった。だが、霧矢は瞬きもせず、淡々と問う。
「貴殿は、誰が為に彼の傘を整備した」
「……誰の為に、って」質問の意図が読めず、たじろぎながら答える凪沙。「カイ先輩……天海先輩の為です。怪我をしてた先輩が戻ってきたときに、喜ぶようにって……」
「其れは、本当に其奴の為だったか？」
「……何が言いたいんですか」
疑る眼差しを崩さない霧矢に、凪沙は痺れを切らして問いただす。すると霧矢はフッと口元を歪ませ、きっぱりと言ってのけた。
「其れは、貴殿の為の整備だったのでは無いかと、言いたいのだ」
「……！」
凪沙は大きく目を見開く。信じられない、という思い

で、眼前の老人を嫌悪すら籠めた目で見つめる。
「そんなことない！　あたしは、カイ先輩の為に――」
「ならば、何故あの様な装飾を施した？」
啖呵を切った凪沙が、ぐっと言葉に詰まる。「そ、それは……あたしの、手癖みたいなもので……」
「良いか、整備士（メカニック）の少女よ」
霧矢は手に持っていた図面を机に置くと、凪沙とは目を合わせず、どこか遠くを見ながら言った。
「拘りを持つことは、悪では無い。だが、職人は自分の為に、物を創ってはならない」
「……っ」
霧矢の視線はほとんど彼女のほうを見ていないのに、凪沙はなぜか心の奥底を見透かされているような心地になる。
確かに動機としては、天海の役に立ちたいと整備に乗り出したのは事実だった。だが――
『しょーじき、会心の出来だとは、思ってるんですけど……』
――その「会心の出来」というのは、確かに彼女にとっての会心の出来、に他ならなかった。
「傘は、人が差して初めて傘と成る。職人が考えるべきは、第一に持ち手の事だ」
その言葉に、凪沙はハッと思い出すことがあった。服飾デザイナーである彼女の母に、服のデザインについて尋ねたときのことだ。
『ねえママ、ここの柄って、ストライプよりドットのほうが可愛くない？　なんでストライプなの？』
母が家でデザイン画を広げていたとき、何とはなしに投げかけた疑問だった。母は彼女の頭をぽんぽんと撫でて、凪沙に笑いかける。
『ハハ、凪沙もあたしに似て、センスあるじゃん。でもね』
母は携帯デバイスのディスプレイを立ち上げ、凪沙に見せる。そこには、服の依頼先である会社から提供された、モデルとなるふくよかな体型の人物の写真があった。その女性は他のよく見るモデルと異なり、椅子に座った体勢のまま写真に映っている。
『この服はね、妊婦さんでも可愛く着られる、っていうコンセプトの服なの。だから座った体勢とか、おなかが膨らんでいても映えるように、かつ、体型とかの悩みをなるべく隠せるように、ストライプ柄がいいかなって。ドットも可愛いけどさ、やっぱり生地が伸びたときに、横に広がっちゃうでしょ。そういうのを見ちゃうと、ああ、あたし太ったんだな……って悲しくなる人もいるだろうし』
その言葉に、普段の「可愛さ」だけを求める母とは違

う、プロの責任やプライドを感じた気がして、凪沙は感銘を受けたのを覚えていた。だいぶ昔のことなのでその時の記憶は今の今まで薄れていたが、霧矢の言ったことと根底は同じなのだと気付き、それを忘れかけていた自分にも悔しくなった。

「……あたし、大事なこと……忘れてたんだな」

俯いて力なく呟く凪沙に、霧矢は言う。

「自分の創る物に自信を持てない職人は、言わずもがな職人とは言えぬ。だが、自分の理想のみを押し付ける職人もまた、良き職人では無い」

霧矢はおもむろに立ち上がると、横一列に立てかけてあった数十本の傘のうち、数本を凪沙に手渡す。

「此れらは全て、霧花の為に作った傘だ」

「……これ、全部……ですか？」

見た目にはもちろん、よく見ると傘の素材や持ち手の長さ、支柱となる板の厚さなど、それぞれに細かな違いが見られた。しかし、どれも僅かに埃を被ってはいるものの、状態としては使い込んだ形跡は見られなかった。

「左様。儂が見習いの頃、父の指導の元、何度も試行錯誤を重ね、一本の傘を作り上げた。其の唯一本を除いた、其の中のどれもが、霧花の為に作った傘でありながら、霧花が持つに足り得る物では無かった」

凪沙は息を呑む。自身の娘だから、という贔屓目はあるのだろうが、それでもただ一人の為に、数十本もの傘を作り上げては没にしていく霧矢を想像し、その気迫に呑まれる心地だった。それは、自身の認識がいかに甘いものだったかを思い知らされるようでもあった。

それでも――仮初めでも、付け焼き刃でも、自分の覚悟を示すためには、凪沙は引くわけにはいかなかった。

「……確かに、今のあたしには、先輩の傘は作れないです。実力もないし、その資格もまだ、無い」

認めるのは酷だったが、口に出すと案外、冷静になれた。たった一日……いや、彼が本当に打ち合いを見届けてから作り始めるのなら、猶予は半日もない。そのわずかな時間で納得のいく出来の傘を作り上げるのは、まさに職人技、プロにしか成せない業だ。一から傘を作ったことなどない凪沙には、土台無理な話だった。

「だったら……せめて、あれを作り直したい。少しでいいから、傘作りを学ばせてほしいんです。お願いします」

凪沙が言ったのは、自ら整備を加えたあの傘のことだった。無理を言っているのは分かっていたが、それ以外に何かを得られる手段も思いつかなかった。

「……儂は、業（わざ）を教えることはしない」

「っ、そこをなんとか！　お願いします！」

「だが」

手を合わせて大きく頭を下げる凪沙に、霧矢は息を多めに吐きながら告げた。

「……此処に在る物は、好きに使うが良い。使い方くら

いは教えてやる」
「……！！」
　目を見開いて、顔を上げる凪沙。先ほどより幾分か柔らかくなったように見える霧矢の目を見ながら、「ありがとうございます！」と再度頭を下げた。
「全く、東京者は世話が焼けるわ」
　そう言いつつ、霧矢はどこか満更でもなさそうに髭を弄っていた。

＊　＊　＊

　長い日も沈み、ようやく幾分かの涼しさを感じられるようになったころ。作業部屋の戸が外から叩かれ、霧花が中へ入ってきた。
「父上、打ち合いの準備が整いましたえ……あら、凪沙さん。ここに居ったんやね」
　今までになく作業に集中していた凪沙は、霧花が近くに来て声を掛けるまで、部屋に来客があったことすら気付かずにいた。
「あ、霧花さん！　すみません、気が付かなくって」
「いえ、気にせんといて。こちらこそお邪魔してもうて悪いなぁ」
　凪沙は慌てて作業台の上を不自然に覆い隠すが、霧花は初めからさほど気にする様子もなく、自身の用件のみを告げる。
「天海さんとの打ち合い、そろそろ始めようと思うて。凪沙さんも見に来るやろ」
「は、はいっ！」
　しばらくアトリエに籠もっていたので、時間感覚のなくなっていた凪沙は内心もうそんな時間かと驚いたが、天海の勇姿はしかと見届けなくてはならなかった。二つ返事で立ち上がり、唐突に襲う足の痺れに唸りながら、霧矢と共に縁側へと向かう。

「あっ、凪沙さん」
　凪沙たちが縁側へ移動すると、そこには既に照の姿があった。すぐ側には浮遊する幽霊のような調停士用通信デバイス、Tell-Telを浮かばせている。
「照、あんたも来てたんだ」
「はい、せっかくなので。普段は直接、お兄ちゃんの戦ってるところを見ることもないですし」
　一応、互いのTell-Telを通して画面越しに様子を見ることはできるのだが、天災の後遺症により視力がほとんどない照は、それを見ても戦闘の様子を理解することは難しかった。直接であれば、音や空気感といった別の五感で、ある程度はその様子が分かるということなのだろう。
「皆さん揃ったようどすな。ほな、始めましょか」

「……ああ」
天海はこの時まで、訓練用の錘(おもり)付き傘を握っていた。おかげで凪沙は彼に断りを入れることなく、自身の整備した彼の傘を手元に置くことができたのだが。
「……ん、そういえば、俺の傘は……」
「あ、あの、先輩！」
取り換える傘がなく辺りを見回す天海に、心臓を大きく拍動させながら凪沙が声をかける。
「えっと……実は、先輩の傘、私が借りてて……まだ完璧じゃないんですけど、整備、し直してみたんです」
「……な、」
思いもよらぬ告白に、天海の顔から血の気が引く。あれ以上の魔改造を施されるとなると、一体どこまでファンシーにさせられるのか。そもそも傘の原型を留めているのか……と、想像すらつかず怯えるような心地ですらあった。
そんな恐怖など露知らず、凪沙は鞘(ケース)に入れたままのその傘を震える手で渡す。
「正直、まだ途中なので自信はないんですけど……でも、今度こそ、先輩のことを想って、整備したつもりです」
凪沙の表情には、これまで天海は見たこともなかった、覚悟を決めたような力強さがあった。それを見て、天海は勝手に嫌な予感を抱いたことを内心反省する。
「……そうか。ありがとう」
鞘を受け取り、スッと引き抜く。それは、昨日までの可愛らしい傘とも、それ以前の元々の傘とも、また非なるものだった。
華美な装飾は取り払われ、骨組を布地が覆うだけのシンプルな構成に戻っていた。ビニールに空色を数滴だけ垂らしたような、透き通った張。その色が感じさせるのと同様、持った感覚は羽のように軽い。無論、ずっと鉛のような傘を振っていたため、感覚が狂わされているせいもあるのだろうが、実際にも傘身は元のものより一回りは細く、軽量化されていた。
「昨日の打ち合いを思い出しながら、先輩の戦い方のこと、なんとなく考えてたんです。多分、先輩は力で押し切るより、スピード感のある傘捌きのほうが得意なんだなって。だからそれを、より活かせるような傘にした……つもり、です」
照れくさそうに語る凪沙の様子を、離れたところから霧矢は感心したように聞いていた。
「少しばかり、傘身に心許なさは有るが……フン。やるではないか、あの小娘」
「あら、珍しおすなあ。父上が素直に人を褒めはるなんて」
「……なに、只の気まぐれだ」
そう言う老人の目元もどこか嬉しそうに見え、霧花はひとり微笑ましい心持ちになる。

「ほな改めて……天海さん、準備はよろしおすか」
「ああ。雪辱は、必ず果たす」
　両者が傘を構え、戦闘態勢に入る。凪沙と照の身にも、ピリピリとした緊張感が伝わり、思わず力が入る。
「――行くぞ」
「フフ。いつでもどうぞ」
　傘を脇に抱え、天海は霧花めがけて駆け出す。

＊　＊　＊

「これは傘の形状とかにも起因するものやから、一概には言えへんのやけど。西と東とでは、傘の扱い方そのものが異なるんよ」
　霧花が本格的に傘剣術の指導を始めたのは、当日の十二時過ぎ――二人が昼食を摂り終えてからであった。日本古来の傘の形である「和傘」と、国際組織であるA.C.I.D.本部から支給される「洋傘」。同じ傘ではあるものの、その作りはかなり異なっていた。
「剣で例えるなら、洋剣（ソード）と刀（カタナ）やね。洋剣は『叩き斬る』、刀は『断ち斬る』。傘身の太さ細さを見れば、違いが分かると思いますえ」
　そう言って、霧花は自身の傘を天海の面前へ差し出す。言われてみれば、和傘は全体的に細身で鋭いが、あまり頑丈そうではない。一方の洋傘――天海が現在手にしているのは実用性皆無の鉄傘であり、典型的な洋傘とは言えないのだが――は、素材としても鉄製で頑丈なため、斬るというよりは殴りつけるような使い方をされることが多い。
「天海さんの傘は、陸斗（りくと）さんから教わったものやろ。あの人の傘術は、律儀すぎるほどの西洋剣術やからなぁ」
　意識して学んだこともなかったが――そもそも、天海は理屈で学ぶより、動きを身体に叩き込んだほうがモノにできる質（タチ）だった――、神宮寺（じんぐうじ）以外から傘使いを教わったこともなかったため、師の癖が残るのも当然といえば当然であった。
「……西洋の傘術よりも、和傘術のほうが強いのか？」
「そう単純なものでもあらへんよ」霧花は微笑んで言う。「あくまで戦い方、得意なスタイルが違うだけで、優劣があるもんやないどす。強さに繋がるのは、流派自体やなくて……そういう戦い方の違いがあることを、理解しとるかどうか、やね」
「……なるほど」
　確かに、霧花は先んじて神宮寺と打ち合った経験があるかのような物言いをしていた。彼の傘使いの癖が天海にも受け継がれているなら、昨日の天海の傘術を読み切ったような振る舞いにも納得がいく。
「せやから……今からウチが教えるのは、和傘の戦い方」
　霧花は自身の傘を手元に戻し、布地を優しく撫でる。

布地、といってもその素材は張りのある紙といったほうが近かったが。
「ウチはあくまで、選択肢を増やすだけ。どう戦うかは、天海さんがご自身で、決めはったらええ」

＊　＊　＊

「……はあッ！」
天海の一刀目は、和傘流の連撃に繋げる一太刀だった。直線的に振り出すのではなく、あえて力が入りすぎないような角度から、次の動きへスムーズに繋げられるように打つ。コンビネーションは今まで彼が不得手としてきた手法であり、動きこそまだ固く拙い。しかし、彼が攻撃手段として真っ先にこれを選んだことは、彼の戦術的な幅の広がりを意味していた。
「……フフ、別にウチが教えた技を使う必要はないんよ？」
「分かっている。俺が試したかったから、試したんだ」
霧花は微笑みながらも、全ての打を的確に受け流す。そして慣れない連撃の流れが崩れてきた隙を見逃さず、針に糸を通すような一突きを繰り出す。
「……ッ！」
間一髪それに気付いた天海は、跳躍して霧花との距離を取る。霧花の傘は宙を突いたが、あと少し反応が遅れていれば胴に突き刺さっていたことは明らかだった。
「攻めの技術は、きちんと形にはなってるみたいやね。じゃあ……守りのほうは、どないやろか」
今度は霧花が駆け出し、天海は構えを取る。これも彼は実戦であまり使ったことのない、カウンターの構えだった。
「……反撃の構えを取るのは結構やけど。天海さん」
天海は、霧花が昨日と同様、連撃の傘を振るものだと思い込んでいた。それが和傘術の主流だと教わったせいもあったが。
霧花の傘は確かに、一刀目こそ天海の予測した通りの振りであった。だが、天海が返しの傘を振ったときには、既に彼女の姿はなかった。霧花は一刀を放ったのち、そのまま走り抜けていったのだ。
「攻撃を受ける前から構えを取るのは……そういう攻撃が来ると思い込んでるっちゅうことを、相手に知らしめることになるんどすえ」
彼が目を見開いたときには、既に対極から飛び込んでくる霧花の傘が、目の前に迫ってきていた。攻撃に集中している人間の体は、最も無防備になる――カウンターの一振りを繰り出した直後の天海も、無論同様であった。
「ぐっ……！？」
胸元に一閃が入り、体勢が崩れる天海。だが、連撃ではなく走り抜ける分の猶予は発生していたため、二撃目

以降は傘を開くことでなんとか対処する。
「ま、カウンター自体に問題はなさそうやし、及第点といったところどすか。まだ実戦で使うには危うそうやけど」
「……簡単に勝てる相手じゃないとは分かっていたが。さすがに、甘くないな」
　口元を手で拭い、天海は一旦心を落ち着ける。相手のペースに乗せられては、昨日の二の舞になることは明白だったからだ。
　一撃貰ってしまったとはいえ、基礎体力をつける修行の成果と、軽量化した傘のおかげで、調子としてはむしろ昨日よりも余裕があった。だが、依然として有効打が見つかっていないのも事実であり、このまま戦い続けてもジリ貧になって押し負けるのは目に見えていた。
（覚えたての和傘術で敵う相手じゃないが、西洋流で戦っても読まれてしまう……それなら）
「フフ、ウチもまだまだ、遊び足らんのでなぁ。もっと楽しませとくれやす……ッ！」
　霧花は舞うようなステップを踏みながら傘を振る。受け流す技術は体得したものの、修行の際は相当に加減していたことがわかる程には、軽やかな足取りとは裏腹に一撃一撃が重くのしかかる。
（こちらから懐に入ったところで、前回のように致命的な反撃を食らうのが見えている……だったら、一太刀浴びせられるのは、相手が攻めてきたタイミングしかない）
「なんや、受けてばっかりでおもろないなあ。教えたのはウチやけど……ほな、これはどう受けはりますかな」
　霧花はニヤリと目を細め、後ろへ大きく飛び退く。助走をつけ、大きく足を踏み込み――これまでと比較すると愚直なほど直線的な一手だったが、おそらく今の天海の腕では、勢いを殺し切ることはできないと直感した。
「上手くいくかわからないが……やるしかない」
　霧花はまるで傘を構えた弾丸のように、天海の懐を目掛けて飛び込んでくる。その傘が振られた方向を一瞬のうちに見定め、自身の傘を縦に構える。
「――今だッ！」
　ガキン、と鋭い音が鳴り――天海の一振りが、霧花の傘を弾き飛ばす。天海は、傘をさながらバットのように打つことで、力任せに衝撃を打ち殺したのだ。
「……あら」
　霧花の傘は回転しながら弧を描き、カラカラ、と音を立てて地面に転がる。打ち合いの中で初めて、霧花が驚いた表情を見せた。
　傘が持ち主の手元から離れることは、すなわち――打ち合いでの敗北を意味していた。
「……勝負あったか」
　霧矢が目を細めて呟く。固唾を呑んで見守っていた照や凪沙も、しばらく何が起こったのか分からず、呆然と

していた。
「此の勝負、貴殿の……天海殿の、勝利也」
「……勝った、のか」
「……や」
未だ固まったままの天海に、凪沙が縁側から彼に駆け寄り、甲高い喜びの声を上げて抱きつく。
「……やった！　やりましたよ、カイ先輩！！　霧花さんに、勝ったんです！　霧矢さんに、傘を作ってもらえるんですよ！！」
「う……、ひ、日暮、落ち着け、首が締まる」
天海の苦しげな声で、凪沙は思わず彼の首を思いきり腕で抱き締めてしまっていたことに気付き、慌てて手を離す。
「す、すみません、嬉しくてつい……」
「……しかし、そうだな。この勝負に勝てたのは、日暮の傘のおかげでもあるからな」
「えっ――」
顔を赤らめる凪沙に、天海は透き通る傘を日に翳しながら言う。
「やろうと思えば、和傘の構造に近付けることもできたんだろう。だが、日暮はあくまで俺の傘をベースに、整備してくれた。洋傘でないとできない戦い方もある……和傘流の戦術を学んだことで、反対にそのことにも気付かされた」
「確かに、あんなに力任せに殴りつけるような傘の使い方は、和傘流にはあらへんからね」
フフ、といつもの含み笑いを見せる霧花。その表情はどこかすっきりとしていて、天海たちが見た中で最も満足気にすら見えた。
「……約束は果たした。認めてもらえるなら、俺の傘を作ってほしい」
天海は傘を鞘に仕舞い、霧矢に頭を下げた。
「言った筈だ、職人に二言は無い」
霧矢の言葉に、大きく胸を撫で下ろす天海。ようやく、この遠征における彼の本懐を成し遂げられたのだ。
「……でも、そうなると凪沙さんの傘はどうするの？　せっかく凪沙さんが、お兄ちゃんのために作ってくれたのに」
照が心配そうに尋ねるが、天海は穏やかに「問題ない」と答える。
「両方、使えばいい。職人の傘も、日暮の傘も」

＊　＊　＊

「日暮、と言ったか」
打ち合いが決着し、霧矢は天海の傘を作る作業に取り掛かる。その横で、凪沙も洋傘に最後の手直しを加えていた。

「は、はい」
「貴殿の傘、見事であった。持ち手の事を考慮して作られたのが、良く伝わった」
「……！！」
　これまで一切、凪沙のことを評価するような発言のなかった霧矢から、初めて出た称賛であった。思わず鳥肌が立ち、頬を紅潮させる凪沙。
「あ、ありがとう……ございます！」
「うむ。しかし、貴殿も気付いてはいるだろうが……些か、耐久面に不安が有る。打ち合いの様な短期決戦の場ならまだしも、長く使い続けるには向かぬだろう」
「……そう、ですよね。私も、そう思ってました」
　そもそも土台（ベース）となる傘が折れているのを補強し使っている以上、長くは保たないのも必然ではあった。その状態で傘身を細くし、霧花の攻撃に耐えられたのは奇跡といってもいいくらいだろう。
「其処で、だ。貴殿さえ許せば、儂に提案が有る」
　その晩の霧矢は厳格な職人ではなく、孫と語らうごく普通の老人のようであった。二人の傘作りは、夜が更けるまで続いていた。

＊　＊　＊

　翌日の明け方。修行の疲れと無事に目的を果たせた安心感から、決闘を終えた後気絶するように眠っていた天海だったが、そのせいかむしろ早く目が冴えてしまい、所在なく一人散歩に繰り出していた。
「……この風景も、この先当分は見られないんだろうな」
　村の景色を目に焼き付けるように、ゆっくりと歩を進める。微風にそよぐ緑が目に優しく、心まで安らいでいく。
　村にいる間は、心なしか照の調子も良かったように感じていた。それは天海も同様で、なんとなくだが村のほうが、呼吸がしやすいような気がしていた。緑は身体に良い、というのを、初めて効果として実感した。
『つい三十年前までは当たり前のようにあった風景だと思うと、一層不思議で……天災が、心底憎らしく思えてきますわ』
　二日前、初めてこの風景を見たときに、霧花がぽつりと放った言葉が脳裏に蘇る。天災が奪うのは人だけではない。人が住み、人以外の命が棲み、それらを育んできた大地さえ、灰色の雨で塗り潰してしまう。どうしようもない理不尽さと、力の強大さに心が打ち震え、霧花の言うところの「心底憎らしく思える」というのが、はっきり理解できた。
「……天魔を狩り尽くすことができれば……この天災も、終わる日が来るんだろうか」
　これまで彼が戦ってきた理由は、出現した天魔の被害

から人々を守るため……もっと利己的に言えば、天魔を放っておけば照が苦しむことになるため、であった。だが、もし天魔を狩り尽くせば、天災自体が終わるというなら――それが一番望ましいのは明白だった。
「殊勝な心掛けね。調停士」
「……っ！？」
突如、どこからか女の声が聞こえ、天海はとっさに振り向く。もちろん照や凪沙ではないし、霧花のものともまた違ったが、どこかで聞いた覚えのある声だった。
「……お前は」
数十メートル先の、日向神社――「天ノ巫女」の伝承があると伝えられた、天照大御神を祀る小さな社――の鳥居の中央に、一人の女性が立っていた。桃色の長い髪に、人間離れしたオーラを放つ背の高い女性。天海は二ヶ月ほど前に一度、この女と遭遇していた。
「『裁きの日』は、もう然程遠くない」
「……！！」
裁きの日。以前、天海がこの謎の女から告げられたのは――「第三次世界大天災」の襲来の予言であった。もちろん、予言が本当である確証はないが……事実であれば、その時は刻一刻と迫っていることを示していた。
「……お前は何者だ。何のために、俺の前に現れるんだ」
「簡単なこと。巫女が育つまで、貴方には巫女を護る義務がある」
「巫女――照のことか？　照のことを知っているのか？」
何者かも分からない人物から照を思わせる発言が出たことで、天海は一気に警戒を強める。だが、女は全ての質問に答える気はないようで、一方的に話を続ける。
「一つ、貴方に忠告がある」
「……忠告？」
「天魔とは別に……巫女自身を、狙っているものが存在している」
「……！？」
巫女を狙うもの。すなわち、照の命か、能力か、何かを奪おうとしているものが、天魔以外に存在する。そう、女は告げていた。
「……どういうことだ」
「言葉の通りよ。敵は、天魔だけではないということ」
「……そいつは誰なんだ。どうして、何のために、照を」
「――護りなさい」
降って湧く疑問を全て打ち消すように、女は天海の言葉に声を被せる。
「貴方の命を賭けても。それが、貴方の使命なのだから」
そう言うと、呆然としたままの天海の前で、二ヶ月前のあの時と同じ突風が吹く。風が頬に当たり我に返った天海は、縋るように女へと手を伸ばす。
「待て……待ってくれ！　まだ話は――」

しかし、伸ばした手は虚しく空を切るのみだった。風に吹かれて舞い上がった青々しく艶やかな葉が一枚、身代わりのように掌へ吸い込まれていったが、天海は荒々しく舌打ちして葉を投げ捨てた。葉は彼を弄ぶかのように、ひらひらと風に踊りながら落ちていった。

「……お前なんかに言われなくても、そのつもりだってのに」

天海は自分に言い聞かせるように、そう呟いた。

天魔から護るのは、これまでずっとやってきたことだ。今更何が変わるわけでもない……だが、天魔ではない何かが、照を狙っているというのは。それは、天海にどうにかできる存在なのだろうか。天魔のような異形の怪物なのか、あるいは――

――天海は首を振り、思考を止めた。憶測で不安がったところで、事態が改善するわけでもない……第一、あの女が本当のことを言っている確証などないのだ。ただいたずらに、彼の内心を掻き乱しては悦に浸る、愉快犯的存在かもしれない……

――それにしては酷く威圧感や神々しさを感じるのも、今の彼には無性に腹立たしかった。

＊　＊　＊

「和傘は、雨に濡れることで和紙の糊が固まり、強度が増す。則ち、天魔を食らわば食らう程、強く成る傘だ」

二日前の約束通り、霧矢は天海たちが村を出る直前に、天海のために作り上げた傘を手渡した。紫の和紙をベースに、白い渦巻きが一筆入れられたシンプルな模様の柄だ。

「くれぐれも、手入れは怠らぬよう。和傘は繊細に扱えば長く保つが、乱雑に扱えば脆くなる」

「……ああ。大切に使わせてもらう」

京極流、の文様が掘られた持ち手を握ると、どことなく素材の温かみを感じ、まるで以前から彼のものであったかのように、しっくりと手に馴染む。

「それと、これはあたしからです。先輩」

凪沙が差し出したのは、彼女の整備した洋傘……であったのだが、昨夜のものとは様相が違っていた。

「……これは」

「懐刀（ふところがたな）ならぬ、懐傘（ふところがさ）です」

手に取ると、それは傘の形こそしているが、昨晩使ったそれの半分以下の長さにまで縮小されていた。困惑する天海に、凪沙はひとつ咳払いをして言う。

「先輩、その傘の中心を握りながら、上に伸ばしてみてください」

「伸ばす……？　……こうか？」

言われた通り傘身を引っ張ると、持ち手の部分からさらに細い柄が飛び出し、柄は二倍ほどの長さに伸びる。

「おお……！」
未知の体験に思わず感嘆が漏れる天海。その表情を見た凪沙は自慢気に胸を張る。
「ふふん、すごいでしょう。普段は懐に忍ばせておいて、イザってときに引き抜くんです。これなら役割も差別化できます……って、これは全部、霧矢さんに提案されたんですけど」
そうなのか、と天海が霧矢のほうを見ると、霧矢は目を逸らして「言わんでも良いと言っただろう」と、どこか恥ずかしそうに呟く。
「それともう一つ……先輩、その傘、一旦開いてみてください」
やけにソワソワした様子で凪沙が言う。「こうか？」と天海が言われた通り、傘を開くと――
「ん……何だ、これは……？」
布地の内側に、小さく何か書いてあるのが見えた。目を凝らすと、それは数字の羅列のように見える。
「数字……何かの暗号か……？」
十一ケタの数字をじっと見ながら首を捻る天海に、凪沙はしたり顔で解説を入れる。
「職人は、自分の作ったものに責任を持つために、銘（めい）を入れるんだって聞いたんです。だからそれは、あたしなりの『責任』です」
そして凪沙は余裕に満ちた顔で、天海にウィンクを飛ばしてみせる。
「困ったら、いつでも連絡してくださいね、先輩っ」
「……え、ええ！？」
その意味に気付いたらしい照が、素っ頓狂な声を上げて顔を赤らめる。
「ど、どうしたんだ照……俺にはさっぱり意味が分からないんだが」
「お兄ちゃんってば、どこまで鈍感なの……これ、多分、凪沙さんの連絡先（アドレス）だよ」
「連絡先……Tell-Tel のか？　でも、それならもう持って……」
「嫌だなー先輩。当然、私用のアドレスに決まってるじゃないですか」
「やっぱり……！！」
ワーキャー言い合う東京の調停士たちを遠巻きに眺め、霧花は苦笑いを浮かべる。
「……あの子、父上の教えが分かったのか分かってないのか、分からんどすな」
「だが、万物は時代と共に遷ろう。あの様な銘の形が在っても、良いではないか」
「……父上、凪沙さんにえらい甘なってませんか」
「気の所為だ」
霧矢に別れと礼を告げて村を後にし、霧の立ち込める

林へと戻ってきた一行。神宮寺との待ち合わせの時間まで、十数分ほどの余裕があった。
「すみません、お土産までこんなに戴いてしまって。ありがたく頂戴します」
「ええんよ、しばらくはこんな贅沢もできひんやろし。ウチと、この村の人からの餞別や思うてくれればええ」
　霧花の家を出る際に渡されたのは、段ボール一杯に詰まった色とりどりの果実だった。天海が両手で抱えるそれを振り返って見ながら、照と凪沙は交互に礼を言う。
「ねえ、照はどれが一番好みだった？　あたしはモモかなあ、ピンクでかわいいし、甘いし」
「うーん、どれも美味しかったけど……私はリンゴが好きかな、甘くて優しい酸味があるところが」
「……フフ。何だか照さんと凪沙さん、最初に会ったときよりも親しげな感じがして、ええどすなあ」
　親目線で微笑む霧花に、天海も頷いて同調する。
「そうだな。照は、これまで対等に話ができる相手が少なかったから……日暮がそうなってくれると、俺としても喜ばしい」
　照が「天ノ巫女」である、というのは調停士部の人間には周知されており、照の能力は組織内において長らく重宝されてきた。だが、これまで歳の近い同性の人間が少なく、また照自身があまり医務室から動けないこともあり、天海や神宮寺を除いた組織の人間と親しい関係を築けていないのではないかと、天海は気がかりに思っていた。自身が馴れ合うのは苦手でも、妹には孤独を感じないでいさせたかった。
「――時に、天海さん」
　わいわいと盛り上がる女子二人には聞こえないよう、霧花は声を落とし、真剣な眼差しを天海に向ける。
「天海さんは、照さんのために調停士をしとるって、そう言うとったやろ」
「……ああ」天海は質問の意図が分からず不審に思うものの、そう頷く。
「……いえ。守るべきもののために戦う、それはえらい立派なことやし、天海さんにとっても、強い力になると思うんよ」
　天海の想いは認めつつも、どこか歯切れの悪い物言いの霧花。
「……でも。余計なお世話かもしれんのやけど」
　霧花は天海のほうへ体ごと向き直り、目を伏せて言った。
「もし、もしもの話やけど。天海さんの守るべきものが、消えてしもうたとき……ある日突然、なくなってしもうたとき。それでも、天海さんは……傘(けん)を執って戦う覚悟は、おありどすか」
「……！」
　天海は目を見開き、瞳孔を揺らがせる。すぐには言葉

の意味を飲み込めないというように、固まったままゆっくり瞬きを繰り返す。
「……俺、は……俺には、その質問に答えることは、難しい」
酷な問い掛けをしているのは霧花も理解しているようで、苦々しく目を細める。
「俺は……ずっと照を守りたいという、それだけの想いで戦ってきた。照のいない世界なら、俺に戦う理由など無い」
「……せやろね。悪いなあ、意地悪なこと聞いて」
霧花は誤魔化すように笑うが、「でもな」と、再び真面目な声の調子で言う。
「その可能性は、ゼロとは言えんのんよ……残念ながらな。そのことだけ、頭の片隅にでも、入れといてもらえばええ」
「……分かった」
自分にその「覚悟」ができる未来は到底見えなかったが、霧花の言っていることが間違っていないことだけは、彼にも理解できた。否定ができない以上、認めたくはなくとも受け入れるしかなかった。
「――天海先輩！」
「お兄ちゃん！」
自身を呼ぶ二人の声にハッと顔を上げると、少し離れたところから、照と凪沙がこちらに手を振っていた。近付いてみると、霧の中からぼんやりと浮かび上がるかのように、見覚えのある車体が現れる。
「お久しぶりです、天海さん。ま、たったの二日ぶりですけど」
車の窓から顔を出したのは、東京支部副隊長で天海の補佐官でもある、神宮寺陸斗だった。天海の後ろに見えた霧花の姿にも気付くと、軽く頭を下げる。
「お世話になりました、京極（きょうごく）さん。うちの天海がご迷惑かけなかったですか」
「いいえ。それにしても陸……神宮寺さん、まるで天海さんのお母さんみたいどすなぁ」
「お母……って、せめて父親じゃないんですか」
神宮寺は眉を顰めたものの、とっさに出た声は柔らかく、満更でもなさそうだった。
「――母親呼びで誤魔化そうとしたんでしょうけど、今僕のこと名前で呼びませんでした？　その調子だと、さては彼らといる間、ずっと名前呼びしてましたね？」
「……さあ。何のことやろか」
「全く……名前で呼ぶのだけは止めてくださいって、以前何度も――」
「あー、そや、ウチも午前中には京都支部まで戻らなあかんさかいに、そろそろ戻らせてもらいますわ。ほな、達者でなー」
「あ、こら、霧花さ……京極さん！」

霧花は一方的に話を切り上げ、助手席側に回って天海らと目を合わせる。後方から睨む神宮寺には触れず、三人の顔を順番に見る。
「本当に、世話になったな。ありがとう」
「いーえ。こちらこそ楽しかったどすえ」
袖を口に当てて柔和に微笑みながら、もう片方の手を振り、エンジンのかかった車を見送る。
「ありがとうございました！」
凪沙と照もほぼ同時に礼を告げ、それを見計らったように、車は霧の中へ消えていった。
「東京でも、おきばりやすー」
静かな木々の空間に声だけが響き、霧に溶けていった。残された霧花は少し淋しそうに息をついて、村の方角へと歩いていくのであった。

〈つづく〉